

「種を蒔く人」のたとえと小標題が掲げられています。いよいよマタイはイエスの第三の説教ブロック(13;1-58)に入ってゆきます。ここでは「たとえ」という言葉を13回も用いています(マタイ福音書全体で17回使用)。彼にとってこの「たとえ」という用語は、天の国を表現するために最も適切な方法であると考えていたことが分かります。また、参考にしたマルコ4章では三つのたとえ話なのに対し、マタイは独自に入手したたとえも加えて七つのたとえ話集に仕上げています。これはマタイが「七」という数字を好んでいたことが動機となっています。この七つのたとえ話とその解説を通して、彼は読者(教会員)に天の国の教えを印象深く語っているのです。

そもそもこの「たとえ」という語は、ヘブル語まで遡ると、通常のとえ話のほかにも比喩・格言・諺・寓話等を意味し、さらに「謎」という意味合いを含んでいます。ですから、イエスのたとえ話は、それを聞いて理解する者には天の国が示されますが、理解出来ない者には結局「謎」でしかないという二重性を持つのです。

さて、本日の箇所は「その日」というマタイの好んで用いる慣用句から始まります。「家を出て」とは36節の「家にお入りになった」で始まる後半部分への対応です。しかも3節の「種を蒔く人が種まきに出て行った」と同じ動詞を使っているので、種を蒔く人がイエスであることを暗示しています。また、マルコ(4;35、5;1)と違って「舟」を登場させるのは、イエスの話を聞いても悟らない群衆との間に隔たりがあることをも表現しているのでしょう。

たとえ話のあらすじはマルコとほぼ同じです。当時は11月半ば頃から1月の初めにかけて大麦や小麦の種を手で蒔きました。その後で耕して土をかぶせました。従って無駄になる種も多く、干ばつや害虫、鳥の被害も大きかったようです。現在と比べものにならない程、食料は貴重でした。なにしろ神の国やメシアの到来時には腹一杯食べられるという記事が多く残っています。

それではマタイはこのたとえ話の中から何を描き出そうとしたのでしょうか。彼が描こうとするのは四通りの種の運命などではありません。そうではなく、徒労と無駄に思える福音宣教ははたしてその現実のままに終わってしまうのかという問いなのです。その問いに晒されながら、マタイは素晴らしい成果があると宣言します。百倍、六十倍、三十倍とマルコとは倍数を逆に記すのも、宣教を高く評価していたマタイの思いが窺えます。彼は徒労と無駄を放棄すべきものと捉えなかったのです。マタイにとって宣教の対象とは人なのです。そして人とは放棄する対象では決してなく「聞く」存在であるというのです。

わたしたちも様々な事柄を聞いて生きています。親や子、友や師、そして反対する者、敵対する者の意見もあるかも知れません。自分以外の意見を聞くということは自分が正されてゆくということでしょう。自分が正しいとする拠り所が壊され問い直されてゆくことが聞くということなのです。徒労や無駄に終わることではありません。語ることも聞くことの方が受け身的なイメージを持ちますが、聞くことが深みをたたえているのは、そこに自分を捨てることがあるからなのでしょう。それは人生を神の恵みを「思い出す」という招きでもあるのです。